



已改

一寸やよまははあはるは後刻影の
 當春のつれづれはさうちよりあはれ
 よみ出さすさうちよりあはれ
 まさして刻つれづれこそあは
 らしき俄のほろろ
 つらきあはれこそあ
 らしきあはれこそあ
 おお急よ
 いらん下されませ
 せましくめ口上



五光

Red rectangular seal impression on the right page.

伊予の志願するところの...
乃びやどめいしくあうの...
あこもきあんで...
ひごん大坊の...
くろもあこ...
こりて...
あん...
そのあつひ...
たぬの...
あ...
き...
く...
師...
風...
やくの男...
あ...
う...
侍...
病...
ほ...
あ...
あ...

わくまゝにうらぐとをきつたかおなう大工のむねお
けのどし一並し一いんのまのつらぬうがらうを
をぞんとたかしてはくごうより俄にせなうを
ういろうやまごうをういろうあてわげくうあや
うぞくもぬぎをぞうなりときめのぞとく
まうちをすてふいぞうのうあう身物のこ
やがうしう見切者のいひるひさし一芝原よ
れ入るうれで蟻もさし虫のすさううひり
るおのれこもさける肺をせりふとさ
て下座うけやそひりなく物う入うす
これにまごびんぐちで小使らうのうあおのれ
えんやまごりとうて貞をさうめとせ
これと舞のいこむいこむすて物やうのうが
ちのあんどたいのいこむかくのまお一目のま九
神が共ううう九大まうううう一その子の定九
郎るれい武がいのささるうううひうう
あくをうてあがるまご一町人ひやうまごの
こにうんのせうまごうたごんもあんで
ううううううううううううううう
まごううううううううううううう
とさすあううううううううううう
のわひうううううううううううう
あううううううううううううう
まごうううううううううううう

いその耐のききんるる一し程き大あさうりそ
その晩のあさうりあきまひは政丸まうり出てあ
こさうり一冊をさうりいご一これこそおん
のもしろくくまれのいよきかしくさうりいひ
きこるれいこいひまめくろくさうりぬ師あ
いぬおんくくの後別程あきまひを政
丸とや一サアく程あ評判のせいごさうりい

いころあの
おんあ
あ

いして忠長義平の道具小書あはれのこと

立後部

上上吉 足利直義公 有道

評判ハく修らんやとの塊

上上吉 大星由良公 志保

そのまはさうりあさうり地

上上吉 天川登義平 松隆

志保のあさうりあさうり

上上吉 桃の井義棟公 車也

あのはさうりあさうり松隆

あ



上上吉

千尋深立良

春凡

婆心ひくくまは対の福り堀

上上吉

加古川幸花

朝花

うまのまきくく人のかんまる天八

上上吉

早世勘平

車足

くまの福くひまのれのおい洗地

上上吉

矢間十太良

枇杷磨

くまのく貫目のくまのあまち

上上吉

塩舌判友

全

くちまきくくおぶくくぬ九寸ま

上上吉

石堂右馬之丞

香土返裏

よくくまのくかきとくけくくく

上上

原 綿衣門

全

源中ふれやめて皆なと巻お

上上

大徳文右

山文

とくかきくくくまの一本やり

上上

竹葉花を八

有道

源河のつまきくくくのもの

上上吉

寺忌平右門

北岱

新白くくくくくくくくくく

歌後部

上上吉 谷 九 古 道

今更席のれりしとあるとび石

上上士 高 師 直 於 家 乃

お切者ハ腹ちりのつとこ

上上士 山 名 次 師 九 工 門 音 遠 甚

おはさのあふりるもあはらん

上上士 鷲 坂 伴 内 枕 把 誓

秀逸をとりおほせと絡の小判

上上吉 伊 介 定 九 良 松 陰

他より小骨とりのし申と蛇のの傘

若女形部

上上吉 勘 平 女 房 か る 全

由工更ハ殿くのほる九つとて

上上吉 義 平 女 房 控 の 於 家 乃

一ツのかしらふたくとりかひ

上上吉 中 花 女 房 堂 系 漸 古 道

氷くまのあまらうらうらハ縁方面

上上士

由良之助女房

車足

一そののりともせりしつゝあまきあま

上上士

判官奥方おほよ赤

ま萩

しよとちりりの河のまをかご

上上士

下女甲

源子

あつあつしるしるあまのまは

上上

一力を仲居

全

月花もくはとぬさうつき

花車形と部



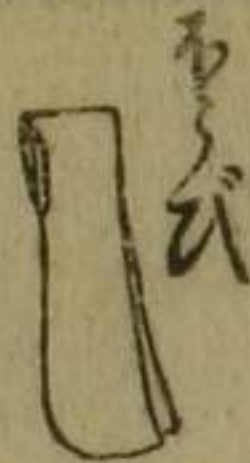
上上吉

高平母

山文

まやびしるしるあまのまは

子役と部



上上吉

お花娘小た

枇杷磨

あまの窓小光りあるまの碑

上上士

大星力弥

古道

お作お人のおまひとらすまの竹

上上

義平一子由雲

車也

うしやまといはせしつゝお人形磨

平氏



道外三部

上上吉

あつほり糸八

徳子

毎吉小氷とたうり糸戸板

上上吉

程 南音清

車足

徳ハその身をねほり小籠

上上吉

程 嶋六

木果

高夜のあつり糸きりこぎ中

上上吉

でつち伊若

有道

石高の程をかきこい帳管

上上

一かた屋敷のま

春下

上上

一文字屋又三清

徳子

あつり糸ハ其のもやいようでぢ

上上士

与一玄清

有道

諸師徳師も舌とまぐ毛毳

上上吉

夜討の場

音遠長

秀のふとあろがし出す山灰俵

羊道三部

至上上吉

太田了竹

春凡

和分の道ふたたりやち杖

平氏



巻軸

上上吉

大星由良之助

外面を以て

末の世乃

武すもみあし

忠と義れ

あし

巴の

中を

本よ



忠臣のうみかやく大星のむくげを
 巴の由らみよなとよあし大星の飯久の事
 てらけりいよた他さくこかきこしよあしむも
 子本子よせありあしよ一首と勅戒の情ありと
 くのあしきんす。[まき]かちよなとよも四十人を
 てらしる外さくおれぬを御子用ひられ入計目者
 事りよ他者の心子五百石の貫目つりおしきく

上上吉

天川伝義平

風狂今多松影



老櫃の

やうりもちま

男と女と

つらけてきみせぬ

猪の寝あ

既述 老櫃の女と舟よす三玉一の女で記う老櫃の
 ありとつひ明かてハ見えぬやうにあり寝あす乃
 ちんとせし 俗名 口 母の寝前とハ寝の
 うちの顔ハハナハ 念仏子らん長巻もあぬ
 マガラせらぬの口引あし 袖のついでに
 をほしむるぞ 既述 泥中のまきいさごの中の
 六ごのよもまきいさご 天川伝義平のますハ成
 なるのくづよくやれ 糸よ 古今集のさび
 翁物あつこのうねハあけくさやんちあよく色み
 くれ 中 長持えけハうらく由代ナずらきり
 せし 守みおや舟よすハ早し口先えやしく

上上吉

枕井若狭と也 豊三事成

白雲の

やぐめ子村と

えいさきや

とあもみをお

甘藷乃桃の針



既九 ちらうやくえぶさうれ樹も成比をよす

とま成枝をうとひ園の桃乃井とつららけ

あううと一文武の西道一花も室もあるとのあち

ぶくうのち中々切者 かい出の助ハ仕内をき得同

くひんくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ハ本中々くひんき 刀のあひ口すうくあいのちん

くはくくくくくくくくくくくくくくくくくく

上上吉 千崎孫五郎 山々春風

新打子

手插千穂

女のふ乃

うちのまき貝を

らと孫五郎



既におららの道具とらと孫五郎とてぶらとせんがはれも
 さらけりく 三三三 せんきだものゆとちいつてさう
 いく いひき そのくふいのるはつて今息のひんくひん
 程のよこをれの海はちいさとちや今一とぬす
 石碑をたぬうりしうぬがうぬぬのうくひんは
 浜させうぞよ 犯静 みのうたれてよと 孫 がまうて
 けらでハちい 孫 ののさちねるるとハちん
 あしち古今と秋ハきぬお禁ハたやうとさぬ
 道やとてしとよ人ハ直しよ の 一 の 一 の 一
 ちんちねハちん の 一 の 一 の 一 の 一
 ちんちねハちん の 一 の 一 の 一 の 一

上上言 早野勘平 一冲事足



一ひひめれ中 意の山をまや
 ちきいて 幸味よき夕立の雨

意の山をまよひて晴てきみよん平がうと
 びのそれさをもとさるる意向よくつかられずと
 上ノ句ゆよんで山匠と云ニまよのびくしありあて
 はん平まはつらうやさくしひやうのありけりなると
 じやむ **びん** タララのをせいつるあうりてつるる雨の
 志ざうんは心うまほせぬ一定高平とききく
 くちぎる雁鳥に死守ともなつたぶえんがしひ意向
 でハこぎぬいづれえらもう玉のあざりえづさな
 志の賤布のぶらちるまときし ぼう者より
 せしと

上上

原口右衛門

福香遠 其

疾炮の業乃我々め早申ども

まららるゝ一味よ

てゝ々々

石法道法



此れ 寸たりやせり 勢向柳の首の廊下はさひあ
 せたる原口右衛門 **書** 出心は是れは、右田平次をうり
 医者と扱ひあうつを右も医者を志すくく **此**
 かならば、いゝいゝおとくは、いゝいゝあのもなれ
 かさうまつけられくものくく、いゝいゝいゝいゝ
 いらぬおさくは、待てく、待てく、いゝいゝいゝ

上上

大智文喜

春山文

師直う首と中もや引
あらん

くま大のの

まの義
羽風に



生花會

好まぬよはるもの人
好まぬよはるもの人

池か 舟浦

師直う首と中もや引
あらん
くま大のの
まの義
羽風に
好まぬよはるもの人
好まぬよはるもの人
池か 舟浦
師直う首と中もや引
あらん
くま大のの
まの義
羽風に
好まぬよはるもの人
好まぬよはるもの人

上上

竹表表ち八

宝有通



忠片此

ふのあまの

さるる物瓶の

棹乃

井 本林



此^{カウミシカ} 續短々れハふるをくひくびやハ庄子のちを
 忠美我のちら成はるべのちをり極めいををい
 ねんちれハハんちんく り四十余人ハ高人
 日産子座を危つしきとりちとくちをハガ水
 ちこちちちちハちちちち みふ みふ
 つい棹の竹よりやつちちちちちちちちちち
 玉川上水ハちちの水の竹表表のりき出さる口えよりく

上上吉

芥九を文

千代古道



九をまたは三味線も
 ききさか
 六も師直へ系と
 のを



師直へ内通の九をみ成を文とこころより口さ
 せんへけやをむくしとすもあはびの
 ちのちてぐりく
 テモテレウクスツテこく
 口はくせんはきうぬく
 手あそび成飛石くせんさうしヤ
 の場るれは口さみせんち
 のすはえんのちうへり
 評よくてせをく

上上士

言師直

福部宗留



仇とある

そとの

かろうも

くそとのふ乃

言師直

仇も 仇すがよそごうの場々々々大とちりあるよ
 うける中々々々回の白乃くせいのよしと云たりやよ
 うとくく 言曲りのみけのちてハ外ハ思ひつらも
 ちりもアアアぬがそでもちがとももの 言き大の井ノ
 の中の船々々々め携提へぶつてとなづけ成大
 すいせるぞ 言 一部の忠臣は此の人よりたより
 くれハ仇とあるえのたより此言の師直みくてもよ
 であされや々々々々

上上士

山名四所たう

扱兵を互



燈籠

たえこの

山名

ろくあり

悪小いあつく

はま子やんあ

此のまよきやすぬらでこきんかきんこの山
 志くけ下のりま若愚のありけりちしハ背
 きののふえとてあかちしぬワ口 結句ちとつま
 つくやちぬきせる乃まをハちいウ 乃九 ちまハ
 志のらし一背強くた説あれ実子難起す
 ちがさかけ押出しすくちれありくちどそ
 ものこるますく

上上士
 海坂伴内
 青山堂拈把丸



おき足て

志のん

魚の

迹
 ねと

如乃きこ

路
 坂
 伴内

此の
 海坂とつるより極是中ひ出さる
 なる一忠に義の人物評す此の忠士とよむ
 是のくもどける仕内とよむ

上上書

芥定九郎

風琴鳥松影



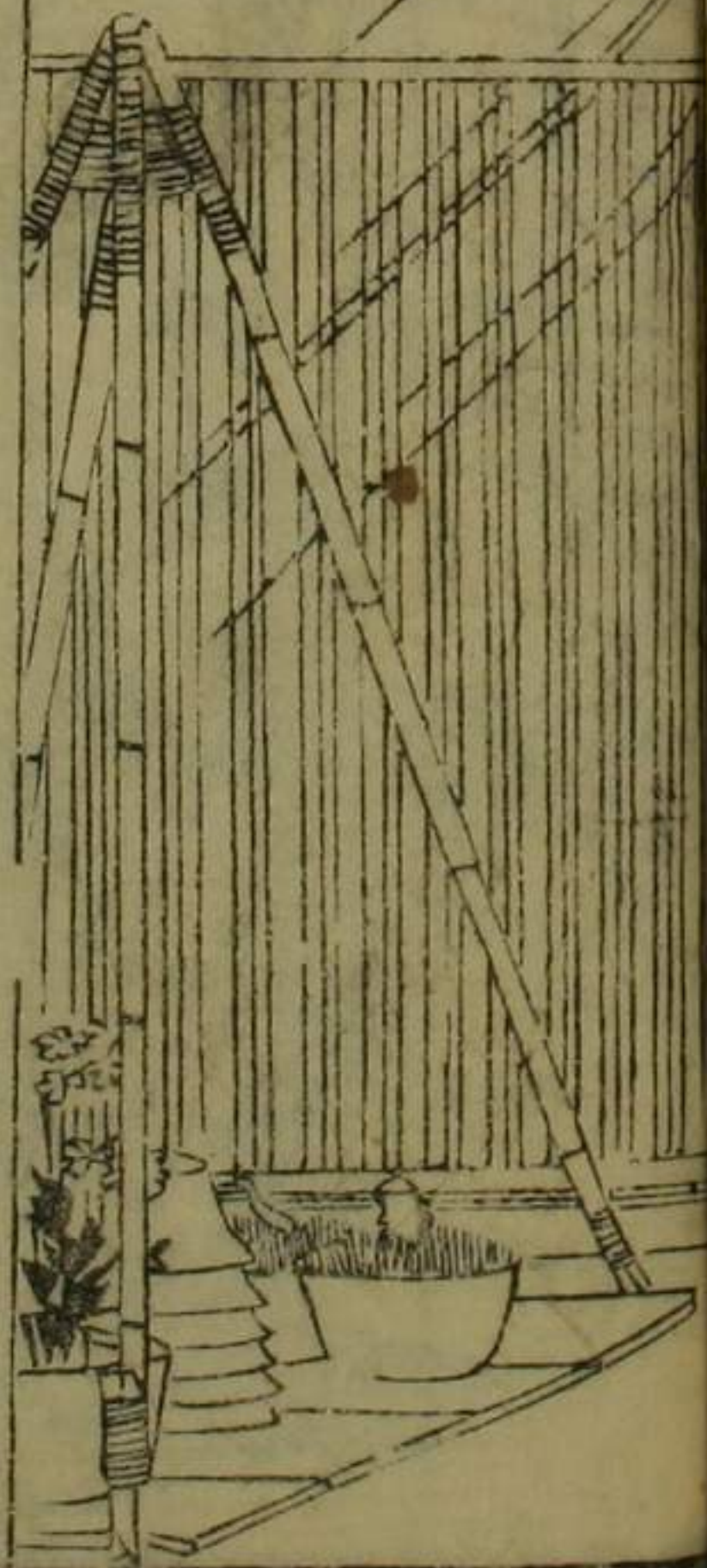
此布ありて四丁

あつより早く

むらさきとハ

主海あつ波の

夜をさくら
きしりて



此れ 此のま道のねぐさニ居てはとりの
 うけられしよしとく **ワ** 此波といひけし
 本よよ方のま道はやはちあるもねるし
 うまぢれハ柄も思はれぬ **い** 是あ
 面なくでけしとるま道は耳よハく
 るしとちんぢるぬく **此れ** 一音の中
 愛ぬち手戒の心のおもはるハ此者のみん
 ちてぬくらしりく

上上吉

あゝ

風吹かすお新

二階より

ふみ足て

うみす河〜もくあそま

の〜鏡

九ツ

ち〜こ



びん 勘平、女あう里ちり〜こち〜さう西あくよ
 中れ中〜玉つきのの〜みちふぬあ〜け〜りあうが
 えんが〜ちつさうとさ〜すち〜こみ〜せ〜め〜い〜
 あ〜うち〜て〜に〜く
 びん 文成端〜ら〜し〜ハ〜景花物換の
 びん 小志ぞの巻著聞集を〜く〜め〜く〜あ〜わ〜く〜何れハ
 めつ〜〜〜ハ〜ち〜い
 びん びん 九い〜〜〜〜〜あ〜う
 ち〜〜〜が〜化〜さ〜と〜ち〜め〜の〜す〜〜〜他人の化を〜
 ちん〜を〜つ〜け〜ア〜く〜つ〜ぶ〜み〜風〜ほ〜の〜ち〜ら〜〜〜〜化
 人のす。あん 大せい ち〜〜〜〜〜よ〜ぬ〜中〜ニ〜い〜の〜大
 びん ち〜〜〜の〜そ〜の〜ろ〜れ〜た〜ん〜び〜く〜〜〜〜〜〜く

上上吉

おぢの

福部なる



きりぬてハ

きりぬてハ

も川せ

とーにてあ乃

あつあせこよちあ

びん ーうきあ成とくぐり半とちりてわらり
 くれ天川を天の川よ以しそ一度のおふせぐり
 わらりとちけくれさる恥お切者うんしそふあしく
 そんすまの懸歎はいよな雲々をまふさるハある
 まのま ひらき ーいびりげのニまハくちをわさ
 てうちのびんきりてさこくくちでにく

上上吉 少ちせ 千代古道



時時多き

かこ川の妻乃とさきよあ増て
小波をつれてせよ山一か



此九 山川は水のすそそのあとのゆるふとす
くそちさる人の心のたぐさむおんく
まづけおれすま ひま ちかぐははのま
行安名はちかぐはちかぐと面お家老の
たぐさむちかぐくくくくくくくくく

上上士

うあよは前

家産まサ秋

ほの世よつせ貞女れ
うてしあはれ
あはれ



貞女はよせ人の貞女のまをとりぬ人の貞士の
 の妻女のまの守の天下一老人これ
 此後處ていあはれつるは忠臣の評でござるん
 貞女ほの世よつせをとりあはれ
 あはれをとりあはれつるは忠臣の評でござるん
 つるは忠臣の評でござるん
 貞女はよせ人の貞女のまをとりぬ人の貞士の
 の妻女のまの守の天下一老人これ
 此後處ていあはれつるは忠臣の評でござるん
 貞女ほの世よつせをとりあはれ
 あはれをとりあはれつるは忠臣の評でござるん
 つるは忠臣の評でござるん
 貞女はよせ人の貞女のまをとりぬ人の貞士の
 の妻女のまの守の天下一老人これ
 此後處ていあはれつるは忠臣の評でござるん
 貞女ほの世よつせをとりあはれ
 あはれをとりあはれつるは忠臣の評でござるん
 つるは忠臣の評でござるん

上上土

下女アム

おん子



やりくと谷の戸のつる雪の乃
 夢をさしつくと山の下屋

おん 小の号よ小時成さうせあひをぬつく山の下
 風よふまこころづくと花でせくと花はまき妙く
 けい かんやい子をぬららねくとよみさののや
 ひいき かのぬがぬ一首よとつちから入くとるち
 けい かんのおんとつひてや風をぬついでハヤ
 ドや ひいき よみこくバわうらうくとよ泳や
 おん かんよがさうねとつちまあうつとよまあ
 志やなまきる昔の奏者としてはとやまよましく

上上

仲居

かみ子

少くも

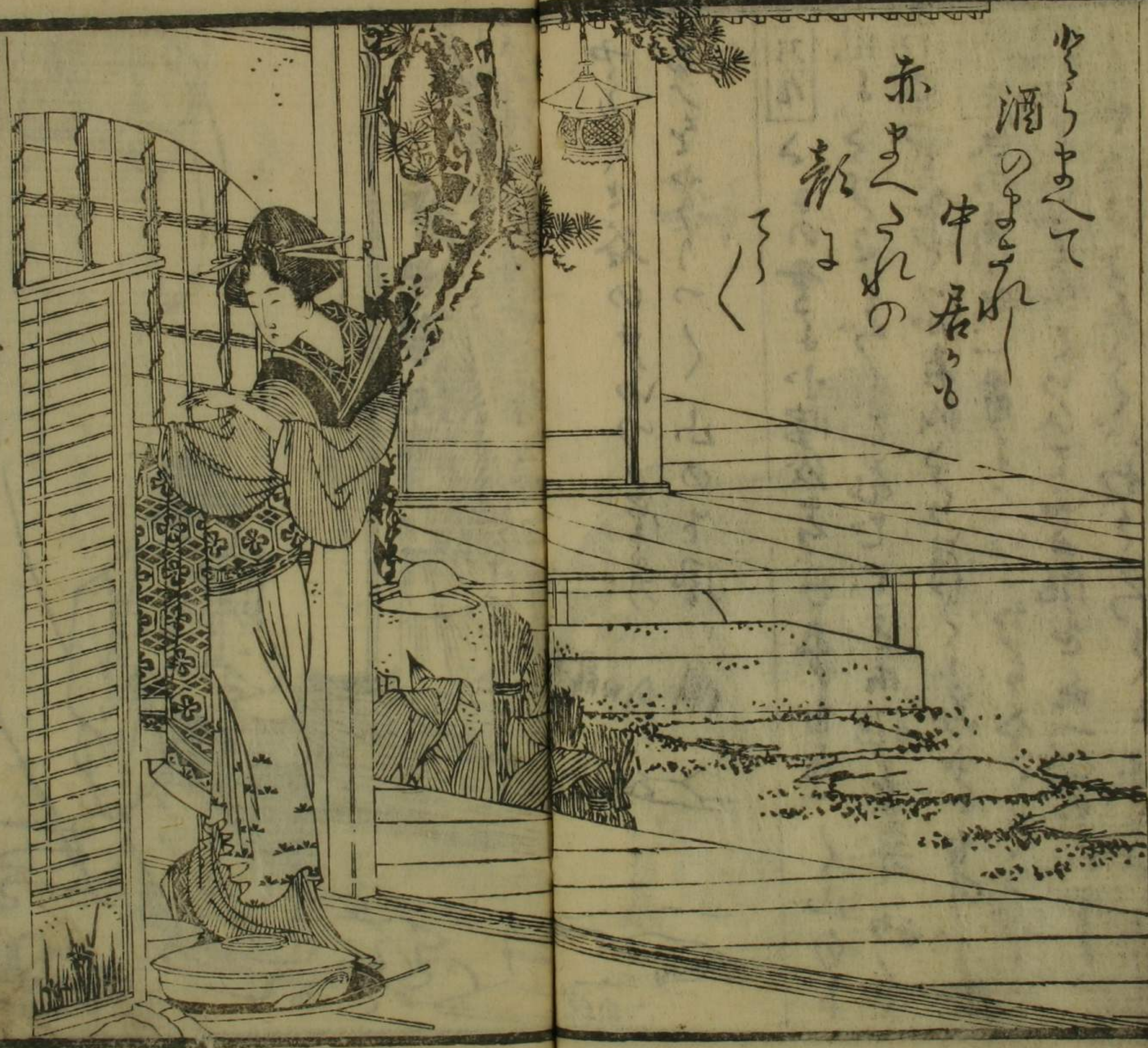
酒のまじり

仲居も

赤まじりの

新よ

く



みん 二この白せごん免のあまむくし 酔る魚のまじり

映しつゝわさるるのちまきくさる 敬向亭
ちんれどちんりくさるつづかれちるちてつく

上上吉

勘平

春山文



ちやいき... 勘平を

あやうの... 勘平

勘平のそれあれは...
 かんたうヨモヤク...
 親きあうく...
 勘平が...
 勘平の...
 勘平の...

上上吉

小吉

青山堂 柏把丸



去る雪のふり袖垣や

こゝろほ

はかり

意は山科

ぬれ みこをたつし こちかみ は家察せら ちる 心の つ
 りくし 意の 山科 はよ うまの こひ でし 雪も あり
 す ころ の よが ころ まち る も ころ の おい え
 よ み ま す ま い い き 心 を か れ 金 圓 守 ち は ち の 文
 く さ お い り 体 は 藍 は あ の り ま し 大 せい
 花 四 く も 口 の ら は く お 切 布 心 る あ く 花
ま の 花

上上土

古生カ弥

千代古道



大厚

男ひ込

秘んカハ

つえとち

海

カ弥あり

り

み丸 山をさすやあすカヤしつららけーと

つ口 上の白さるるしつららけーとみ丸

うまのまひから千ヤトまぐる 歌向より

上上

松

豊

る

成



南無

法印 松山 南無

長持を後へてひまもめいん

きーのうきんそまら

松

形人形きしより外に致向のちいほやぶる由松とハ
 すぐつたられやま アちおをりししむぬの
 明と義平よりの上やまびしおよハ似つぬ
 く西月つくこれそむも天川やハハヤいるアヤぞ
アちやうま作せられハぬのこもちれた糸まの
 志のくづ由去の由ちよわすまら子ほハ似合
 らとてられまらよしなく

上上吉

冬つゆり弥八

少しゆん子



山の

名乃

あつしれつてよ

おくまら

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

あつしれつてよ

上上吉

狸角を束

一休事不足



柏子あゝ門は狸の角を束
 獅子
 うちまひひくうきさうや

うれしきよみやくいごいあゝ成うくまおたゞよ丸
 ちりいハちつたりくさちあゝつかられりて
 かゝのこのこの柏子よまはる口も出まづひ免つ
 ろうちまあやどまゝるをき初五ふ字の柏子な
 くちがハまらゝものぐ洋判をえちこのん
 おちあゝり成るもの首筋十二羽のちりつて
 英一襟も多分拵て感えず風情面も志れ礼曲ど

上上吉

夜おこ場

橋を渡る



新付 小舟

まき おちる

川筋

うらつるまて
まのり 戸障子

既免 十一段めよ管おつくといおむつうはきのゆえ
 成このそそとつこま成どりて小舟しやまるといひ
 さて弓とつるのこまをよけられハあまをい
 あひせんあひこらうとわれのあきよいは題句
 ひひきあひの拍並志をばやとぬけめのあへ朝の
 らたり天とあられハ川とあえ上下の句のかけ
 合書りある 大星の胸中 あかきり

至至上吉

ち田々竹

山く春風



えんをききみそて遠ひのす竹も

よくの根かきも

ほんの菽

医者



ひん 尼くそらぶひとしあやぶ医者をもけく始終竹の
 縁律えつつけらねくいうも根元の骨髓すそ
 のせんきも垂るべき強向じ先より口のほえらるる
 やすすいおみそおよお功者と人もあやぶを
 ぶ成らう ひいき ちんらう根奇の心肝とをあのよく
 きくわくあうやうく

